

舞踊家ジャン・ジョルジュ・ノヴェールの家族・弟子と モーツァルトのオペラのバレエ音楽

(神戸モーツァルト研究会 第212回例会)

野口秀夫

1. はじめに

ノヴェールはその著者で「振付師は、偉大な画家たちの絵画を参考にすべきである(第Iの手紙)」、「バレエこそは見事な絵画の複製、あるいは当の本物である(第IIIの手紙)」などとバレエを絵画に譬えている。しかし、バレエの演劇性における音楽の重要な位置づけについてはほとんど述べていない。モーツァルトとの出会いで相互に補完すべく影響しあうことはあったのだろうか。

2. ノヴェールについての一般評価

舞踊家ジャン・ジョルジュ・ノヴェール(Jean Georges Noverre 1727-1810)は、従来のステップと音楽のみを基軸とするバレエから脱却し、ミミックやパントマイムをも取り込み、しっかりとした台本に基づく劇的な舞踊を提唱した。この主張は『舞踊とバレエに関する手紙』(1760、シュトゥットガルト、リヨン)で明らかにされたが、イタリア人舞踊家ガスパレ・アンジョリーニ(Gaspere Angiolini 1731-1803)は『ノヴェール氏に宛てたバレエ・パントマイムに関する手紙』(ミラノ、1773)で舞踊とマイムあるいは劇的なものとの結合が、ノヴェール個人の功績に帰せられるのを批判し、師フランツ=アントン=クリストフ・ヒルファーディング(Franz Anton Christoph Hilverding van Wewen 1710-68)の先進的な仕事を引用している。[中略]革新的舞踊家としての優先権争いはともかく、近代バレエへの第一歩がヒルファーディング、アンジョリーニ、ノヴェールの三者による世紀の中頃からの一連の動きの中で踏み出されたのは間違いのないところである。[以上小学館『モーツァルト全集』第15巻 p.243 吉田泰輔氏解説より抜粋・追記]

3. ノヴェールの活躍の地と主な作品

ノヴェールの年表にモーツァルト父子の手紙を挿入し関連付けを試みる。

1727.4.29 パリでスイス人の兵士の父とフランス人の母の間に生まれる。

1740 以前 パリのバレエ教師マルセルに師事。(のちにはパリ・オペラ座の第一舞踊手ルイ・デュプレに師事)

1743.6 フォア・サン・ローランにてファヴァールのヴォードヴィル《村の鶏 *Le coq du village*》でデビュー。

1743.10 フォンテーヌブローで踊る。(オペラコミックにおいて早くからマリー・サッレやラモーと接触)

1744 ベルリンに赴き、ハッセの《アルミニオ *Arminio*》(1745)や、おそらくグラウンの作品で踊った。

1747 末 フランスへ戻ったノヴェールは、マルセイユでバレエ教師になる。

1748 最初の振り付け作品《中国の祝日 *Les fêtes chinoises*》(1748)を手がける。

1749 舞踊手・俳優のマリー=ルイズ・ソヴェールと知り合い、結婚。

1749.1.2 長女ルイズ=ヴィクトワールがシュトラスブルクで誕生(1812.9.5 歿)。[ローレンツ]

1750.4 リヨンの首席舞踊手となり、マリー・カマルゴと組む。

1750-51 長男のアントワーヌがリヨンにて誕生(1829.4.14に78歳4ヶ月で歿) [リンハム p.176]

1751 《パリスの審判 *Le jugement de Paris*》(1751)を上演、彼の最初のシリアス・パントマイム・バレエとなる。

1752.1.24 次女クロードイヌ=ジェルヴェーズがリヨンのプラス・デ・テローにて誕生。[リンハム p.176]

1753-54 シュトラスブルクと契約

1754-55 パリ・オペラ・コミック座と契約。(めまぐるしく変化する非対称パターンや最新にコーディネートされた衣装・場面・照明、そしてしばしば演じられるパントマイム・エピソード

で彼は伝統的な主作品の効果を変えた)

1755-56 および 1756-57 シーズン デイヴィッド・ガリックと組みロンドンのドゥルリー・レイン劇場の舞踊手一座を監督。(不運にも反フランス感情のため、彼の《中国の祝日 *Les fêtes chinoises*》(1755.11.8)の上演は失敗。病気の回復期に『舞踊とバレエに関する手紙』を纏める)

1757-60 リヨン・オペラ。自らのアイデアを実行に移すべく、作曲家のグラニエと新作 13 曲を共作。うち 3 曲はシリアスな性格を持つ。(軽快でカラフルなパントマイム・バレエにより多くの成功がもたらされた)

1759 秋 『舞踊とバレエに関する手紙』出版。(出版日は 1760 年となっている)

1760 シュトゥットガルトのヴュルテンベルク宮廷と契約。(遠近法画家セルヴァンドニ、衣装屋ボケ、パリから招待されたガエタン^{注1}およびアンジリオ・ヴェストリス^{注2}を含む大舞踊一座、そしてヨメリ、F.デラー、J.J.ルードルフの音楽統括を得た。新作 20 曲のうち《メディーアとジャゾーネ *Médée et Jason*》(1763)は彼の最もよく知られた作品となる)

1766 ヴュルテンベルク宮廷が支払い不能となり多くの雇い人を解雇した後の 1766 年、彼はポーランド王スタニスラフ・アウグストの宮廷劇場に自ら過去のバレエ作品の広範な上演を申し出た(ワルシャワ・マニユスクリプト)。回答を受け取れずに 1 年ほど経った 1767 年、彼は後のフランス王妃マリー・アントワネットが招聘してくれたヴィーンに向かった。[Wikipedia のドイツ語サイトより]

1767 春 ヴィーンではアフリジョがフランスの芝居とバレエの一座を招くと申し出、ブルク劇場の権利を得ていた。これによりノヴェールがヴィーンの皇帝家と 2 つの劇場のバレエ教師の要職を獲得。(ヒルファーディングの振り付け経験や、その弟子のアンジョリーニのグルックやカルツァビージとの共作を支持していたヴィーンの人々はノヴェールのパントマイムに対して受容力があつた。これが彼の絶頂期であつた。彼は少なくとも 38 の新作バレエを上演し、多くの作品を復活上演した。またグルックの《アルチェステ *Alceste*》、《パリデとエレナ *Paride ed Elena*》を含むいくつかのオペラを振り付けした。彼の監督の下、ブルク劇場向けにはシュタルツァー(Joseph Starzer 1726-87)が、ケルトナートール劇場向けにはアスプルマイヤー(Franz Asplmayr, 1728-86)がバレエ音楽を書いた。これらには、型通りの舞曲の旧式の閉じたフォームに加えて、他の器楽曲ジャンルの開発を先取りしたパントマイム・エピソードを伴うラプソディックで明白なプログラムのセクションを含む。

1767.3.26 《レ・プティ・リアン *Les petits riens*》がブルク劇場で初演された。曲はおそらくアスプルマイヤー。[新全集 NMA II/6/2 序文]

1767.9.29 ヴィーンの LM からザルツブルクのハーゲナウアーへ「ハッセのオペラ(祝典劇《パルテノーペ》1767.9.9 初演)は見事ですが、歌手たちはこうした祝典の催し物のためにはちっとも特別なところがありません。[中略]でも踊りは第一級で、その主役は有名なフランス人の[ガエターノ=アッポリーノ=バルダッサーレ・]ヴェストリスです。」

1768.9.8 ヴィクトワールがヴィーンでヨーゼフ・ジュナミと結婚。ノヴェールが結婚契約書にサイン。花嫁側の立会人はクリスティーアン・シュテークネルン男爵。フランツィスカーナープラッツ 1 番地の彼の家にノヴェールは住んでいた。花嫁の二人目の立会人フランツ・ホイフェルト(この人もまた、この家の入居者でありそして王室皇室預金局ではシュテークネルンの直属の部下であつた)がおそらくこの住宅を斡旋した。ホイフェルトは公の活動のほかに劇場作家として活躍した;彼は戯曲や喜劇を書き、それらは当時盛んに上演された。このような活動がおそらくホイフェルトとノヴェールを結びつけたのであろう。ホイフェルトは 1768 年末にドイツ語劇の監督を引き継いだ。これはヴィクトワール・ジュナミとモーツァルトを結びつける人物の第 2 の活躍として特筆すべきものである。モーツァルトは 1768 年のヴィーン滞在時にホイフェルトとすでに知り合いになっていた。したがってモーツァルトは 1768 年にすでにノヴェールや彼の娘と接触していた可能性は高いが今のところ証明されていない。[ローレンツ]

1770.1.26 ミラノの WAM からザルツブルクのナンネルへ「ヴィーンで踊っていたピック氏が、ここミラノでも踊っています。」

1770.3.24 ボローニャの WAM からザルツブルクのナンネルへ「ピック氏が舞台上で踊り、そのあとミラノの舞踏会でみんなが踊ったメヌエットを近いうちに送らしましょう。当地ではいかにみんながゆっくりと踊るか、ということだけはわかるでしょう。メヌエットそのものは、とっても美しいのです。(じっさい 3.27 に送り、4.21 には感想を求めている。ま

た、このメヌエットをモーツァルトは4.25にシーデンホーフエン宛にも送っている。)」
1771.9.13 ミラノのLMから妻へ「今日、私たちは[《アルバのアスカーニオ》の]バレエの練習を見ましたが、2人のバレエの主演舞踏手ピックとファビエが熱心なのでびっくりしました。(中略)[最終コーラスのバレエには]ソロの踊り手ピック氏、ピネッティ夫人、ファビエ氏、それにブラシュ嬢は含まれていません。」

1771年ノヴェールはナポリ王から黄金拍車勲章をもらっている。フルディナント大公とマリア・ベアトリーチェ・リッチャルダ・デステ大公女との婚儀の折の貢献に対してであったという。ミラノで1771.10.15から始まった結婚の祝典に、《アルバのアスカーニオ》と併演されたハッセの《ルッジェーロ》へのインテルメッツォ・バレエをマリア・テレジアの命により担当したものである。上演にはノヴェールもウィーンから赴いてきていたはずであるが、モーツァルトの書簡には言及がない。[書簡全集IV p.13]

1771-72 ウィーンでの興業が莫大な費用を要したため、アフリッジョは宮廷の援助を求めたものの、結局ヨーゼフ2世により、1771年3月にフランス芝居の一座の退去が決まり、72年2月にさよなら公演が行われる。

1772.12.26 ミラノのLMから妻へ「今しがたダステ夫人のお宅での昼食の席を立ったところで、このお宅で今この手紙を書いています。夫人はおまえたちによろしくとのこと。あと、2、3時間でオペラ[《ルーチオ・シッラ》]がはじまります。神のお恵みを！総稽古は、おととい、とてもうまく行われたので、この上ない成功が期待できます。バレエなしに音楽だけで4時間も続きます」

1773.1.16 ミラノのLMから妻へ「ヴォルフガングのオペラはもう17回も上演されたし、全部で20回ほど上演されるだろう。第2オペラは今月の23日に始まるはずだったが、事がまことに順調に進んでいるので、支配人たちは、はじめ500グルデンだけの約束だったのに、今ではもう1000グルデン以上を得ています。そこで第2オペラは30日ごろにはじめて舞台にかけられることとなります。」

1773.2.6 ミラノのLMから妻へ「たいへんな費用で立派に舞台にかけられた第2オペラの上演中、事故がおこり、次席舞踏手のサロモーニがアキレス腱をちがえてパネがきかなくなってしまい、この謝肉祭いっぱいもう踊れなくなり、これがバレエ《ジアゾーネとメデーア》^{注3}でたいへんな混乱をひきおこしました。」

1773.2.17 ケルトナートール劇場でノヴェールを称える音楽会が開催された。10日後の新聞が「彼は『アガメムノンの復讐』と大きな英雄的・軍隊的なコントロールダンスで大いに期待通りの手法を見せてくれた。彼のお嬢さんはクラヴィーア協奏曲を芸術性に富み巧みに演奏した」と報告している。[ローレンツ]

1773.8.28 ウィーンのLMからザルツブルクの妻へ「明日はノヴェールさんのところで食事をします。」

1774 ノヴェールも1774年にはウィーンを去ることとなる。ウィーンのポストを引き継いだのはアンジョリーニであった。同年ミラノの王立劇場からの招聘を受け入れる(ミラノの人々はすでにノヴェールの弟子を通じ作品を知っていた。しかし、彼の努力は報いらなかった)。

1776 春/夏 ウィーンのケルトナートール劇場の一座を仕切る。

1777 パリ・オペラ座と契約。(彼の選んだテーマは舞踏の表現にはそぐわないと考えられた。また純粋な舞踏を捨てた彼の長いパントマイム作品は謎と捉えられた。パリの聴衆は彼の軽い作品、例えば、主にモーツァルトの作曲であるリバイバル作品《レ・プティ・リアン》(1778)を好んだ。そのほかは全く失敗であった)

1778.2.25 と 26 ザルツブルクのLMからマンハイムのWAMへ「ノヴェールがパリのオペラ座でバレエの首席舞踏家なのを、おまえは知っているだろうか？」

1778.4.5 パリのWAMからザルツブルクのLMへ「ぼくが書こうとしているのは、あるオペラのための1幕ではなくて、全2幕、全くぼく自身のオペラです。台本作者はもうすでに第1幕を仕上げました。ノヴェールは(ぼくは彼の家で好きなときによく食事をさせてもらっていますが)全体に目を通し、意見を聞かせてくれます。それは《アレクサンドルとロクサーヌ》という題になると思います。ジュノメ夫人 [Mad:me jenomé] も当地にいます。」

1778.4.20 ザルツブルクのLMからパリのWAMへ「私とナンネルからグリム男爵様に、

ド・ノヴェール御夫妻に、それにジュノメ夫人 [Md:me genomai] によろしくと伝えてください。」

1778.5.14 パリの WAM からザルツブルクの LM へ「もうすぐ、ぼくの第 2 幕のオペラの台本が手に入ることと思います。そうしたら、まず、支配人のド・ヴィーム氏が受け入れてくれるかどうか、彼に見せなければなりません。でも、その点については間違いありません。なぜかといえば、ノヴェールがそのことを提案しているからで、しかもド・ヴィームはその地位をノヴェールのおかげで得ているからです。ノヴェールはやがてまた新しいバレエを作るところで、そのときはぼくがそれに音楽をつけることになっています。」[書簡全集ではこの新しいバレエを「バレエ・インテルメッツォのためのスケッチ」K.299c であろうとしている。アンダーソンは《レ・プティ・リアン》K.299b としている]

1778.6.11 ピッチンニのオペラ《偽りの双子の娘 *Le finte gemelle*》の幕間に《レ・プティ・リアン》が上演された。新聞によれば踊り手は息子の方のヴェストリス、ドーベルヴァル^{注4}、ギマール嬢、アラール嬢、アスラン嬢。作曲家モーツァルトの名前は見当たらない。[リンハム p.93]

1778.7.9 パリの WAM からザルツブルクの LM へ「ノヴェールのバレエに関しては、彼がおそらく新作を作るだろうということだけをお知らせしました。彼はちょうどバレエの半分をほしがっていたので、ぼくがその音楽を書きました。つまり 6 曲は他の作曲家によって書かれたもので、それは古くさい、みじめなフランスの歌からできています^{注5}。序曲とコントルダンス全 12 曲は、ぼくが書きました。このバレエはもう 4 回 [正しくは 6 回] も上演されて、大好評を博しました。しかし、ぼくは今では、あらかじめ謝礼がどのくらいあるかわからないときは、絶対に何も書かないつもりです。今回は、まったくノヴェールへの友情の結果にほかなりません。[中略] もし、オペラの注文を受けたら、実に厄介なことになるでしょう。でも、それほど、気にはしないでしょ。もう慣れっこになっていますから。ただ、あの忌まわしいフランス語が、音楽にこれほど不向きでさえなければね！」

1778.9.11 パリの WAM からザルツブルクの LM へ「今になって(というのは、ぼくが発することを言っておいたからです)オペラを 1 曲本当に書かされることでした。でも、ぼくはノヴェールに言いました。“オペラが出来次第、すぐに上演されるという保証があるなら、そして、ぼくがいくら得られるのか正確に言っただけなら、あと 3 か月ここに留まって、それを書きましょう”。すぐに断るわけにもいきませんからね。そうでもしないと、ぼくに自信がないと思われてしまうでしょう。でもそのようには実行されませんでした。(そしてぼくは初めからそんなことはありえないことだとわかっていました。)当地では、そんな習慣はありえませんからね。すでによくご存じだと思いますが、ここではこんなやり方です。もし、オペラが出来上がると、試演してみる。間抜けなフランス人どもがよくないと言えば、それは上演されない。そして作曲家は無報酬で書いたというわけです。ところがいい作品となれば、舞台にかけられる。拍手が増すにつれて、支払いもよくなる。確実なものは何もないのです。[中略] ぼくは 3 つの協奏曲、つまりジュノミ女史 [*die jenomy*] のための [K.271] と、リッツァウのための [K.246] と、変口長調の [K.238] とを、ぼくのソナタ集を版刻してくれたひとに、現金で売り渡すでしょう。」

1781.9.12 ヴィーンの WAM からザルツブルクの LM へ「主席舞踏師のアントワーヌがミュンヘンから呼ばれて、ヴィーン中と近郊の町々で出演者の募集が行われています。ノヴェールの哀れな教え子たちがまだ残っていますからね。この 8 年間、足一本動かしたことがなく、ほとんどみんな棒切れのような連中です。」

1781.11 ロンドンのキングズ・シアターでの輝かしいシーズンの契約を開始。(パリから舞踊師たちを伴って、自らのリバイバル作に集中。パリの定期刊行物ですら彼の勝利を報じた)

1781.12.11 プリンス・オブ・ウェールズ臨席の下、バルテレモンが新しく曲をつけた《レ・プティ・リアン》が上演された。[リンハム p.102、p.170]

1782.6-1787.3 隠遁生活。この間、彼はリヨンで 3 つのバレエをリバイバル。

1787-8 および 1788-9 のシーズン ロンドンでかつての成功を当てに契約。(いくつかの新作のタイトルは、彼が重要性を認めないと長らく公言してきた種類の豪華な《ディヴェルティスマン *Divertissement*》であった)

1789 革命に際し、フランスの田舎のトリエルに逃れる。

1793-4 および 1794-5 2 シーズンをロンドンで振り付け師として過ごす。(重要な新制作、《オーリードのイフィゲニア *Iphigenia in Aulide*》(1793)が成功。彼の最後の作品、パイジェットのカウンタータに付けたアレゴリー・バレエ《ラ・ヴィットリア *La vittoria*》(1794)を制作)

1795 サン・ジェルマン・アン・レーに引退。最後の数年を初期の著作の改訂や増補に当てる。
[以上特記以外はカトレン・ハンゼルによる *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (1980)のノヴェールの項より。手紙は高橋英郎・海老澤敏編訳『モーツァルト書簡全集』白水社より。リンハムは Deryck Lynham: *Father of Modern Ballet The Chevalier Noverre*, Sylvan Press, 1950 より。ローレンツは Michael Lorenz: *Mozart. Experiment Aufklärung im Wien des ausgehenden 18. Jahrhunderts. Essayband*, pp. 423-29, Hatje Cantz, 2006 より引用した]

4. 長男アントワーヌについて

長女のヴィクトワールについてはローレンツの研究で初めて存在が明らかにされたが、ここで長男アントワーヌについて纏めて紹介しておこう。

4.1 アントワーヌの生業

リンハムによればアントワーヌは公務員であったようである。

- (1) 父ノヴェールは息子にバレエの作曲、編曲そしてリハーサルをしてもらいたいと思っていた。(p. 80)
- (2) 父ノヴェールは、女帝マリア・テレジアの口利きでフランス宮廷に来てすぐに [1776 年?] 王妃の化粧室へ入る許可を得る榮譽を授かった。息子のアントワーヌは皇室農場の会計監査官として任命され、それとともにセリクルの男爵領を授かった。(p. 82)
- (3) [1795 年] パリに戻った父ノヴェールは健康を害し、革命中に蓄えを失い、旧体制の下で契約されたゆえ、またオペラ座の財政難のゆえに年金も停止された。そして彼の息子はその地位を取り上げられた。(p.114)

4.2 アントワーヌに対する亡命者嫌疑と解除

http://collections.geneanet.org/ouvrages/index.php?action=detail&livre_id=17505&page=121&book_type=livre&rech=NOVERRE&ik=d2220cb4ab640e92

『ソム県、県立アーカイヴ シリーズ L の所蔵目録サマリ 県行政の布告記録』を参照するとアントワーヌはトリエルに在住し、そこで亡命者リストに載せられ財産も仮差押えされたが、後に解除されていることが分かる。

- (1) 亡命者リストからの抹消事由申請：
革命暦 III 年 - ヴァンデミエール [葡萄月] 13 日 アントワーヌ・ノヴェール、トリエル在住、モンタニュ・ドゥ・ボネール地方 (セヌ・エ・オイセ)
- (2) 亡命者リストからの抹消。関連布告：
(革命暦 3 年) ジェルミナル [芽月] 12 日 アントワーヌ・ノヴェール
- (3) 国有財産の仮差押および売却：
モンターニュ・ボネール地方 (セヌ・エ・オイセ) トリエルのアントワーヌ・ノヴェールの財産仮差押解除。

トリエルは父ノヴェールも革命に際し逃れていた町である。しかも同様のことが父ノヴェールにも起こっていた。リンハムによれば以下のとおりである(p.110)：

「フランスでは、[英国に] 同行できなかったノヴェール夫人が家財道具すべての押収に対して控訴しており、彼女の夫はなんら亡命の意図があって 1792 年 12 月に国を離れたのではなく、ロザムデの伝説に基づく悲劇の制作のために地方色を求めてちょっとウッズストックへ訪問しているだけだという証書を提出していた。オペラ座 (今や “ 共和国と芸術の劇場 ” と改名された) の仲間の芸術家たちは彼の作品が芸術であること、そして彼は共和国によって発行された有効なパスポートの所持者であることを申し出た。ノヴェール夫人は夫の愛国心及び戦争によりフランスへ帰国しようにもできない状況を示そうと夫と交わされた手紙を提出した。申請は 1795 年 2 月に認められ、ノヴェール氏は逃亡者とは見做されず、押収に掛かったコスト、売却に掛かったであろうコストの支払いを条件として、彼の財産、言い換えればその売却によって生じる価値は彼に返還されるとの命令が下された。」

4.3 ナポレオン戴冠式への参列 http://books.google.co.jp/books?id=hJlxxLSXnSOC&printsec=frontcover&as_brr=3 フランソワ・ブレ著『フランスの歴史 サン・ジェルマン・アン・レー』によれば

「1804年12月2日の皇帝戴冠式には二人のサン・ジェルマンノワ[サン・ジェルマン市民]が公式に列席した：前農政主任検察官でセリクール村のアントワヌ・ノヴェール、そして皇室費による建築工事の監査員ピエール=ヒッポリ・レモンである。多くのサン・ジェルマンノワが混雑の中、パリのノートル・ダム寺院前で儀式に臨んだ。」

4.4 父の旧友との交流 http://dvm.nu/files/musik_forskning/1996/mf1996_04.pdf

ヘニング・ウルプ著『コペンハーゲンにおける舞踊、1750年頃 - 1840年』によれば

「1820年、若きオーギュスト・ブルノンヴィル(August Bournonville 1805 - 79)は[デンマークの]“アド・ウス・プブリコス Ad usus publicos”財団^{注6}の支援を受け父親[アントワヌ・ブルノンヴィル(Antoine Bournonville 1760 - 1843)]とパリへの研究旅行に旅立っており、彼が既にこの時点で多作の作家[振付師]であったことの証となっている。5月2日から12月12日の旅行を彼は詳細に日記に付けている。パリで父子はデンマークの同僚を訪問し、そこで何日かを楽しみ、舞踊練習やヴァイオリン演奏で過ごした。例えば5月26日金曜日には「わたしたちは8時に起床し1時間バトマン^{注7}を練習、1時間ヴァイオリンを演奏した...」。彼らはオペラ座やその他の劇場を訪問し父の旧友たち、アントワヌ・ノヴェール(有名なジャン=ジョルジュ・ノヴェールの息子)、オーギュスト・ヴェストリス、ルイ・ニヴェロン^{注8}、ディドロ^{注9}およびルイ・ミロン^{注10}に会った。」

4.5 アントワヌの墓所ボワシー墓地

<http://www.patrimoine-de-france.org/oeuvres/richesses-45-14143-99138-M144940-242967.html>

『文化遺産の目録』サイトによれば

「17世紀末までボワシー墓地は教会の東側通り、すなわちメッソニエール・アヴェニューとカセルン・リュウの間にあったが、現在のサン・ルイ・リュウ、すなわちノートル・ダム寺院の裏手に引っ越した。トゥールネル(小さな塔)と呼ばれる現在の墓地は1827年に市当局の大規模区画整理により開所された。1829年に遡る二つの墓がそのままに残っている[1827年に遡る一基と1829年に遡る一基の古い墓を見ることができるとも^{注11}]: 埋葬者はセリクールのノヴェール夫人マリ=アンヌ・ボードレールそして王国農務地方総監であったセリクールのアントワヌ・ノヴェールであると二基の墓標に刻まれている。この墓地はその墓の形においてイル・ド・フランス地域によく見られる特徴とは異なったものを持っている。」

5. モーツァルトのオペラ用バレエ音楽

5.1 《アルバのアスカーニオ》のバレエ音楽^{注12}

1771年9月13日のレーオポルトの手紙にはセレナータ《アルバのアスカーニオ》K.111のバレエ音楽に関する詳細が次の通り述べられている。

「セレナータは、実際は2部の劇以上のものですが、ヴォルフガングは神の御加護で12日後には完全に仕上げられるでしょう。楽器なしのレチタティーヴォと楽器付きのレチタティーヴォは全部仕上がりましたし、8曲ある合唱もそうで、このうち5曲には踊りがつきます。今日、私たちはバレエの練習を見ましたが、2人のバレエの主演舞踏手ピックとファビエが熱心なのでびっくりしました。最初の演技はヴィーナスで、女神は精霊たち、三美神たちに付き添われて雲上から降りてくるのです。」

シンフォニア(序曲)のアンダンテは早くも11人の女性舞踏手によって踊られます。つまり精霊たちが8人に三美神、あるいは美神が8人と3人の女神たちです。シンフォニアの最後のアレグロは、32人の合唱隊員、つまりソプラノ8人、コントラルト8人、テノール8人、それにバス8人の合唱で、同時に16人、つまり女性8人と男性8人とで踊られます。

別の合唱1曲は羊飼いたちに羊飼いの乙女たちのもので、つまりこれも別の人たちです。それから羊飼いたちだけの合唱、つまりテノールとバスのもので若干と、羊飼いの乙女たち、つまりソプラノとコントラルトの別の合唱がいくつかあります。最後の場では全員、つまり精霊たち、三美神たち、羊飼いたち、羊飼いの乙女たち、男女の合唱隊員と踊り手たちが全部集まり、彼らは全部で最終合唱を踊ります。ここにはソロの踊り手は含まれていませんが、ピック

氏、ピネッティ夫人、ファビエ氏、それにブラシュ嬢です。合唱で、ある時はソプラノ 2 人、ある時はアルトとソプラノ等々のあいだで現われる小さなソロは男女の舞踏手たちのソロとも交りあいます。」

ここで踊りがつく 5 曲の合唱曲と言っているのは、新全集 (NMA II/5/5) のタリアヴィーニの序文によれば第 2 曲、第 9 曲、第 33 曲の他、恐らくは第 6 曲と第 28 曲、あるいは第 28 曲と第 29 曲であろうという。これにさらに序曲のアンダンテとアレグロに踊りがつく。

また、1771 年 9 月 7 日の手紙でレーオポルトは次のようにも述べている。

「ヴォルフガングには、今、手いっぱい書くものがあります。あの子は、2 幕または 2 部をお互いに結びつけているバレエも作曲しなければならないからです。」

これに相当する 8 つの舞曲が自筆スコアの第 1 幕と第 2 幕の間に筆写譜で残っている。現存するのはバスのみであるが、モーツァルトの自筆譜は仕上げられるとすぐにピック氏やファビエ氏に手渡され、失われてしまったものと考えられている。新全集 (NMA II/5/5) には第 1 部の幕が下り、第 2 部の幕開きを待つ間に、羊飼いの娘たち、三美神や精霊たちとニンフたちなどが登場しての美しい建造物出現の場面があり、これがバレエの形で踊られるつなぎのシーンとして説明されている。

5.2 《ルーチオ・シッラ》終結のバレエ音楽

印刷台本に記されたバレエの表題は以下の通りであった。

第 1 バレエは《後宮の嫉妬 La gelosia del serraglio》^{注 13}

第 2 バレエは《降神術の学校 La scuola negromanzia》(作曲者不明。ただし旧作の流用)

第 3 バレエはシャコンヌ

これらのバレエのために 32 人の踊り手と 2 人の振付け師 - シャルル・レ・ピックとジュゼッペ・サラモーニ (「ポルトガル人」と呼ばれていた) が初演より 1 年前に既に契約されていた。モーツァルトの備忘譜には舞踏手としてマリーア・カッサチ、ジュゼッペ・サラモーニ、フランチェスコ・クレリーコ、エリザベッティ・モレリ、リッカルド・プレク、アンナ・ピネッティ、シャルル・レ・ピックの名前が書きとめられている。なお、レ・ピックはノヴェール門下生であった。

ルーチオ・シッラの第 3 幕を閉じるバレエは差込葉によればチャッコナのタイトルであり、音楽は疑いなくオペラの最終合唱と同一である。モーツァルトはガメツラのテキスト構成 (合唱が 3 部、2 節のソロが間に入る) に従って、フランス風シャコンヌの形式で作曲している。当時の筆写スコアのひとつはこの合唱を実際にチャッコナと記述している。18 世紀の多くのバレエの最終楽章と同様、合唱はフランスオペラや器楽曲のリフレインとエピソードからなるロンド形式に従い、フランスシャコンヌの特徴的な 2 分音符、4 分音符のアウトタクトを持つ 3 拍子のリズムによっている。シャコンヌがステージや舞踏会場で踊られるときに、トゥッティがリフレインを演じ、ソリストがエピソード (クープレ) を演じるように、ルーチオ・シッラの最終合唱 (No.23) では 3 楽節の合唱がリフレインを形成し、二つのソロ楽節がクープレを形成している。ガメツラは異なる二つの合唱楽節の最初の楽節から全詩行とフレーズを併合、巧みにリフレイン形式を準備している。モーツァルトの曲はハーモニーとオーケストレーションを通じてシャコンヌの特徴を際立たせている。ミラノオペラにおいて、今回のように歌手付の舞踏シャコンヌフィナーレは極めて異例のことであった。ルーチオ・シッラに限って、台本作者によってもたらされることができたものであった。一般には作曲家はオペラだけに責任を持てばよかった。つまり、短い、新鮮な合唱をソリストたちに提供すればよい。そして続く器楽のシャコンヌはミラノのローカル作曲家の担当であった。しかしながら、1772 年 12 月 26 日のルーチオ・シッラでは最終合唱が踊られ、そして歌われたことにより、最後にバレエが置かれるという目録の表示を十分に満たしていると言えるため、No.23 のあとに更に別の純器楽のシャコンヌが演奏されたということは考えないでよいだろう。

[NMA II/5/7、カトレン=クズミック・ハンゼル校訂 1986 年による]

5.3 《イドメネーオ》のバレエ音楽

シャコンヌ Chaconne 二長調

パ・スール Pas seul (ル・グラン氏 de Monsieur Le Grand) 二長調

パスピエ Passepied (レトヴェン嬢 pour Mademoiselle Redwen) 変口長調

ガヴォット Gavotte ト長調

パッサカリア Passacaille (アントワーヌ氏 pour Monsieur Antoine^{注14}) 変ホ長調

シャコンヌは第1幕のあとにまとめて演奏されたいが、第1幕と第3幕のあとに分割されて演奏されたとする説もある。

第1曲のシャコンヌはスペイン起源の舞曲で、17世紀にフランスに入りロンド風の舞曲になり、さらにバッハなどにより主題と変奏曲という形で使われるようになった。第2曲パ・スールはロンド風の舞曲で、文字通りひとりで踊るもの。初演のとき舞踏監督だったル・グランが踊った。第3曲のパスピエは元はブルゴーニュ地方の速く軽快なダンスだったもので、17世紀にフランス宮廷で優雅な舞曲となった。第4曲ガヴォットはアルプス地方の古い舞曲だったものが18世紀にフランス宮廷で洗練され2拍子系の舞曲になった。第5曲パッサカリアはシャコンヌと同様の流れにあるロンド風舞曲だが、フランス宮廷でのオペラにおける挿入バレエの終曲は多くの場合パッサカリアと題された。

[モーツァルト・コン・グラーツィア <http://www.marimo.or.jp/~chezy/mozart/> から引用]

6. まとめ

以上からはノヴェールとモーツァルトがお互いが強く影響しあった証拠は見えてこない。オペラのパレエにしても、《レ・プティ・リアン》にしてもモーツァルトがノヴェールから受けたであろう音楽への影響は間接的なものに留まると言えるであろう。求める方向が違っていただけであろうか。あくまでも二人は侵されずに並んで立っているという印象が残るのである。

注

注1: ガエターノ = アッポリーノ = バルダッサーレ・ヴェストリス(1729-1808)。パリのデュプレの弟子で、1751年には第一舞踊手となっていた。[モーツァルト書簡全集 1767.9.29 の注を参照]

注2: マリ = ジャン = オーギュスタン・ヴェストリ (通称オーギュスト・ヴェストリス) (1760.3.27 - 1842.12.5)。ガエターノ・ヴェストリスの非嫡出児としてパリで誕生。後に“舞踊の神”と呼ばれる。12歳の1772年にディヴェルティスマン《金婚式 La Cinquantaine》で舞台デビューを飾ったオーギュストは、直ちにその才能を広く認められた。1776年にはソリストとなり、1778年にはブルミエ・ダンサーに昇格した。[Wikipedia を参照]

注3: 《モンゴルのシスマノ》の挿入パレエのひとつでノヴェール作。このパレエは、すでに1771年ヴェネツィアにおいて、メタスタージョの台本、アントーニョ・サッキ作曲のオペラ《シリアのアドリアーノ》の上演の折に取り上げられたが、音楽はおそらくはレ・ピックであろうと思われる。[モーツァルト書簡全集 1773.2.6 の注を参照]

注4: ジャン・ドーベルヴァル (Jean Dauberval または Jean D'Auberval, 1742.8.19 - 1806.2.14) は、フランスのパレエダンサー・振付家である。現在も上演されている最古のパレエの一つ『ラ・フィユ・マル・ガルデ』の作者として名を残している。[Wikipedia を参照]

注5: フランス風というからには初演時のアスプルマイヤーの後にフランス人の作曲家が関与していた可能性がある。

注6: 1765年から1842年の間に活動した財団。若き作家や芸術家の外国における修行に資金を提供した。アンデルセンの1822 - 1841の教育、旅行にも資金が提供された。

注7: 足を打つ踊り方。グラン・バトマン、プチ・バトマンがある。

注8: ルイ = マリ・ニヴロン (Louis-Marie Nivelon 1760.8.15 フランス生まれ)。

注9: マリ = フランソワーズ・クリストゥ著・佐藤俊子訳『パレエの歴史』(文庫クセジュ 1970年)によればフランス人、シャルル・ディドロ (Charles-Louis Didelot 1767-1837) は、ストックホルムに生まれ、パリでドーベルヴァルとヴェストリスの教えを受けた。ロンドンではノヴェールに出会った。彼はパリ、ついでリヨンのオペラ座で活躍した (p.83)。佐々木涼子著『パレエの歴史』(学習研究社 2008年)によればシャルル・ディドロはロシア帰りの振付家で19世紀のパリ・オペラ座で活躍。ガルデルとミロンを脅かした。彼の『フローラとゼフィール (花と西風)』(1815)では西風が機械仕掛けのワイヤーで高々と空を飛んで劇場を沸かせた。

注10: ルイ = ジャック = ジュセ・ミロン (Louis-Jacques-Jessé Milon 1766.11.25 - 1845)。

注11: ポワシー墓地は2009年には1年間公開されていたが現在は閉鎖されている。

<http://www.viafrance.com/evenements/ancien-cimetiere-de-poissy-visite-287943.aspx>

注12: 野口: 『アルバのアスカーニオのパレエ音楽 K.111 再現の試み』を参照。

<http://www.asahi-net.or.jp/~rb5h-ngc/j/k111.htm>

注13: 神戸モーツァルト研究会 第211回例会参照。 <http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasg502/211.pdf>

注14: ミュンヒェンで首席舞踏師であった。1781.9.12 付けヴィーンのWAMからザルツブルクのLMへの手紙参照。

(2010年3月22日)